

第六講 伊勢物語

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

昔、左兵衛さひやうゑの督かみなりける在原ゆきひらの行平ゆきひらといふありけり。その人の家によき

酒ありと、上にありける左中弁藤原まさちかの良近まさちかといふをなむ、まらうどざねに

て、その日はあるじまうけしたりける。なさけある人にて、瓶かめに花をさせ

り。その花の中に、あやしき藤の花ありけり。花のしなひ、三尺六寸ば

かりなむありける。それを題にてよむ。よみはてがたに、あるじのはらから

なる、あるじし給ふと聞きて来たりければ、とらへてよませける。もとより

歌のことは知らざりければ、すまひけれど、しひてよませければ、かくな

む。

咲く花の下にかくるゝ人⑤を多みありしにまさる藤のかげかも

「など、かくしもよむ」といひければ、「おほきおとどの栄花の盛り⑥にいま

そがりて、藤氏⑦のことに栄ゆるを思ひてよめる」となむいひける。皆人⑧、

そしらずなりにけり。

(注) おほきおとど…太政大臣藤原良房。

問一 傍線①②③の解釈として、もっとも適当と思うものを、左の各群の中から選び、符号で答えなさい。

①「まらうどぎね」

- A 雅客 B 正客 C 新客 D 珍客 E 来客

②「なさけある人」

- A 人の悲しみが理解できる人
B 心が広く相手のあやまちも許せる人
C 歌の上手な人
D 花の好きな人
E 上手に趣向がこらせる人

③「あやしき」

- A 不思議な B 奇妙な C その場にふさわしくない
D みごとな E 恐ろしい

問二 傍線④「すまひけれど」の主語を示す語句を本文中から十字以内で抜き出しなさい(句読点は一字に数える)。

問三 傍線⑤「かくるゝ人」を、「など、かくしもよむ」と言った人は、どのような意味に考えたか。それを示すもっとも適当と思うものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 時の権力者の力を恐れて、目立たぬ位置にいたいと思っている人。
B 時の権力者にへつらい、地位の安泰を願っている人。
C 行平一族が世の権力者の位置につくことを望んでいる人。
D 行平一族など何の力もないと見下している人。
E 行平一族の援助を待ち望んでいる人。

問四 傍線⑥「いまそがりて」を現代語に訳しなさい。

--

問五 傍線⑦「る」と同じ語を本文中に探し、前後各一字と共に抜き出しなさい（句読点は一字に数える）。

--

問六 傍線⑧「皆人、そしらずなりにけり」は、どうしてそうなったのか。それを示す、もつとも適当と思うものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 歌が非常にうまく、深く感動したので。
- B 下手な歌と笑ってやろうと思った意図に反したので。
- C 歌の作者の巧みな説明に納得したので。
- D 自分たちの知識の低さが露顕しそうになったので。

--

問七 二重傍線の品詞とその文法的意味をそれぞれ二字で答えなさい。

--

問八 a この文章は主人公の名は省略されている。その名を漢字四字で答えよ。

--

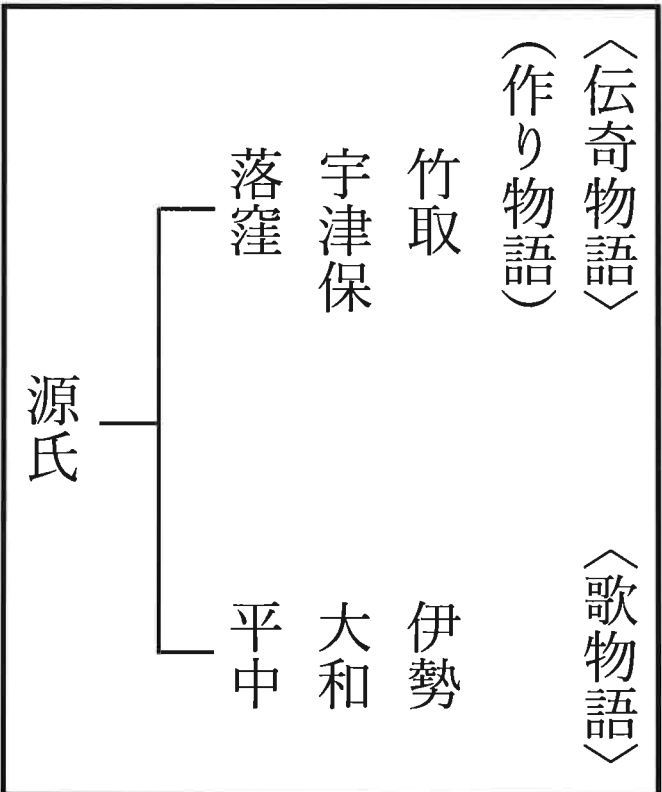
b その主人公の名を文中に挿入するとすれば、どこが最も適切か。その箇所を前後の二字ずつ抜き出しなさい（句読点は一字として考えない）。

--

第六講

『伊勢物語』

- ・ 別名『在五中将日記』
ありわらのなりひら
- ・ 主人公 在原業平
- ・ 「みやび」の文学
- ・ 六歌仙の一人



うへ【上】

- ① 天皇(帝)
- ② 清涼殿の殿上の間
- ③ (貴人の)正妻Ⅱ北の方

あるじ【主】

主人・主君

cf. あるじす・あるじもうけす || もてなす・
ごちそうする

まらうど【客人】

客人・来訪者

cf. まらうどざね【客人実】 || 主賓

はらから【同胞】 || 兄弟・姉妹

まうく【設く】(動)

① 準備する・用意する

② 手に入れる・持つ

まうけ【設け】(名)

① 準備・用意

② ごちそう・ごちそうを用意すること

にて (格助 断定+接助)

① 〴〵で

② 〴〵として

なさけ【情】

- ① 風流心・風情
- ② 思いやり

あやし【怪し／賤し】

- ① 不思議だ
- ② 身分が低い
- ③ いやしい
- ④ 見苦しい
- ⑤ みすぼらしい

題詠……決められた題で歌を詠む

ばかり（副詞）
程度（ゴロ・ホド）
限定（ダケ）

すまふ

【争ふ】 抵抗する

【辞ふ】 断る・辞退する

さ ↓ そう

かく ↓ このように

しか ↓ そのように

指示副詞

形容詞の語幹の用法

名詞(A)＋を＋形容詞の語幹(B)＋み

↓AがBなので

※「名詞(A)」・「を」は省略されること
がある

〈例〉AをBみ ↓人を多み(人が多いので)

ABみ ↓山寒み(山が寒いので)

Bみ ↓浅み(浅いので)

※「み」を「し」に変えて形容詞になれば
その「み」は「なので」と訳す

ありし

ありつる

ありける

以前の

ありし

①以前の

②昔の

③生前の

かげ【影】

①光

②姿

③面かけ

かな

かも

な

詠嘆の終助
くダナア

など(て)(か)——連体

①どうして

②なぜ

し ⇔ も
副助 係助詞

強意

昔、左兵衛府の長官であった在原の行平という（人が）いた。「その人の家においしい酒がある」と（聞きつけて人々が集まってきた）、清涼殿の殿上の間に行った（＝出仕していた）左中弁藤原の良近という（人）を主賓（または、正客）として、その日はご馳走の用意をしたのだった。（行平は）風流心がある人であって花びんに花をさしている。その花の中に、不思議な（＝奇妙な・かわった・めずらしい↓見事な）藤の花があった。垂れ下がっている花房の長さは、三尺六寸（一寸が三センチなんで一メートルちよつと）ほどあった。その（藤の花）を題として（歌）を詠む。

（人々が）詠み終わる頃に、主人（在原の行平）の兄弟である（人、イコール在原業平、この人は主人公なんで必ず登場するぞ！フルネームで書けるように！）が、（兄の行平が）ご馳走なさる（または、宴会をひらいていらっしやる）と聞いて（業平）はやって来たので、（人々は業平を）つかまえて（歌を）詠ませた。（業平は）もともとから歌のことは知らなかったので、辞退（または、拒否）したけれども、無理に詠ませたところ、このように（詠んだ）

咲いている大きな藤の花の下に隠れている人が多いので、以前にもまさっている立派な藤の姿でありますなあ

「どうして、こんなふうに詠むんだ」と言ったので、「太政大臣様が栄華の絶頂に（または、絶頂で）いらっしやって、藤原氏が格別に栄えているの思つて詠んだ歌（です）」と言った。その場にいた人は皆（この歌を）非難しなくなつてしまった。